

か	き	く	な	る	る	ん	う	う	る	い	く
か	な	だ	は	し	が	う	よ	か	の	な	な
も	が	よ	よ	た	ち		う	と	ん	ま	じ
が	ー	サ	に	く	に		も	だ	え	べ	ら
わ	は	き	ー	た	さ	は	い	だ	よ	で	ル
ン	み	モ	べ	ん			ち	ー	ぬ		さ
ー	す	は	ー	ら	あ	い	し	も	べ	ぼ	が
ワ	き	が	れ	る	ろ		よ	た	ル	く	ち
ー	な	ど	ー	る	か	ん	に	く	ー	の	る
ル	の	ん	ば	よ	ら	な	あ	さ	が	あ	ん
ド	か	な	ん	ー	さ		そ	ん	ち	い	と
に	な	さ	す	ぼ	い	か	べ	い	ぼ	い	あ

				る	に	い	く	う	の	と	ル	ラ	い
				よ。	あ	て	つ	も	や	そ	う	も	が
					そ	み	か	の	う	み	ろ	あ	いた
					び	た	く	て	い	も	う	る	ら
					に	い	き	じ	空	え	ね	か	よ。
					き	な	み	ら	を	ば	き	ら	イル
					て	の	だ	と	れ	ホ	と	ル	カ
					ね。	ほ	せ	か	ぶ	き	い	テ	い
						く	な	ら	の	み	だ	ル	り
					ま	の	か	か	は	よ。	の	し	に
					う	に	な	な	ど	ま	え	ホ	ク
					て	ち	の			え	に	テ	ジ

佐々木 玲緒 より

スイミー

二の二

山口

明理

わたしは、スイミーが赤いお魚

たちときょうかして、大きな魚を

おい出して、みんなが海であそべ

るようにしたことがすごいと思ひ

ます。

スイミーは自分のきょうだい

ちを大きなマグロに食べられたの

に、ほかの魚たちのためにがんば

たのです。

かなしいことがあっても元気を

とりもとせるスイミーの強さがす

ごいと思います。

わたしがかかない気もちになっ

ているとき元気になる方ほうは、

ママかパパに話をして、かなしい
ことが頭からなくなるように、い
つしょに考えることです。ほかに
も、へやに入てねて、おきた時
には、かなしいことをわすれるよ
うにすることもあります。
かなしいことかあ、でもスイミ
ーのようにな、だれかの役に立てる

ようにがんばりたいと思います。

ちいちゃんのかげおくり
三年一組 山崎 けいと
ちいちゃん、いっしょにげようね。の
たしの家においで。わたしがちいちゃん
の友
たちだ。たら、つう言っ
てあげたいです。わ
たしは、このお話をさいしよに読んだとき、
とても悲しい気持ちになりました。なぜなら、
せんそうによつて、ちいちゃんのような小
さな子どもたちがなくなつたからです。
わたしが一番心をうたれた場面は、ちい

ちゃんか一人でかけおくりをしたら、空からお
父さん、お母さん、お兄ちゃんの声が聞こえ
てきて、ちいちゃんは空に向かつて行き、家
族にさい会できた場面です。
なぜなら、せんそうによつてこんな小さな
女の子が家族とはなれはなれになり、一人ぼ
ちで橋の下で知らない人と会ったり、食べ
物が十分なかったり、とてもつらい体けんをし
たからです。わたしがちいちゃんだ。たら、
とてもふふ安でなきます。でも、ちいちゃん

た。た一人がぼう空ごうの中ですよ。さい
後まで一生けん命がなりました。たとえは
せんそうがなかったら、ちいちゃんや家族は
とても幸せで、おなかいっぱい食べるこ
とができます。おなかいっぱい食べるこ
とがわたしは、今年の夏休みに図書館で、
たろのはかという本を読みました。それ
小さな子どもが主人公の、せんそうのお話
です。二の中でも、子どもたちがせんそうの
さいになり、親をなくし、食べ物もなく、学

校へも行けず、つらい思いをしていました。

二のお話から学んだことは、せんそうは
んなの明るい未来をうばってしまうという
ことです。今、わたしには家族がいて、毎日
安心してくらしています。そして、わたしの父
と母は、いつも食べ物を用意してくれるので、
わたしはおなかいっぱい食べることも出来
ます。また、毎日学校や習いごとにも行
たくさんのことを学ぶことができてます。わ
しは本当はとても幸せなはずなのに、それが

当たり前になっ
ています。ちい
ちゃんもわた
しの立場をくら
べると、ちい
ちゃんの方が
ま、とつらい思
いをしています
。だから、今こ
うして安全に平
和にくらしてい
ることに感し
ゃしょうと思
います。まわりの
人にやさしくせ
たりしたり、こ
まっでいる人に
手をさしのべた
りして、みんな
がなかよくくら
せるようにし
たいです。

「教室にゆうれいがいる!!」を読んで

四年一組 佐藤 早千花

私はゆうれいを見たことがない。だから私は、ゆうれいなんていないと思っている。しかし、この本のタイトルを見て、きょう味がわいた。一体どんなゆうれいなのかな?と思った。私は幼稚園の時、夕すずみ会で、おばけやしきに入ったことがある。友だちと十人ぐらいで、真暗な部屋の中を歩いた。こわくて、心ぞうがバクバクしながら、友だちの

後ろにピタッといっておそろおそろ歩いた。

おばけやしきの中は、ドンドンと物音がした

り、おばけの人形が見えたりした。こわか

たので、友達のせ中にずとかくれていた。

おばけやしきから出た後も、心ぞうはまだド

ストキしていた。だから、ゆうれいはこわい

印しようが強い。

この本の主人公のしゅう太は、小学校四年

生。学校のコンピュター室でゆうれいが出

ると兄から聞いていた。しゅう太は落ち着い

ていて、一歩引いて見ている子だ。友だちの
こ、平はお調子者で、さわぎがあればその中
に飛びこみ、さわぎをも、と大きくしてしま
うような子だ。私はさわぎがあ、たら、ま
う味かわいてその中に行、てしまうと思う。
そんな時でも冷静でいられるし、う太は大人
びた感じがした。
し、う太とて、平、それと友だちのりえと
さきの四人でコンピュ一ター室にいるゆうれ
いの正体をつきとめていく。

教育実習で来ていた柚木先生は、この学校
のそつ業生だった。先生が六年生のころし、
う太の夢をみんなで短づくに書いた。柚木先
生は、ゆうれいとな、て出てきた夢はまだ生
きている夢だと気づいた。生きている夢とい
うのは、まだあきらめていない夢のこと。た
とえば、先生のゆうれいは、実は柚木先生
のかつて思っていた夢だった。柚木先生が
その夢をまだあきらめていないから、その夢
が目を覚ましてゆうれいとな、てあらわれた

ということだった。

この本で印しよ的な言葉は、夢、て、そのものにも強い力がある。夢、て生き物なんだな。てよく分かったんだ。持ちつづけな^さ弱、て死んじやうけど、がんばれば、それが栄ようにな、て生きつづける。生きつづければ、大まくな、て、いつかかなう。だ。私のしよ来の夢は考古学者だ。歴史の本を読むのが好きで、友だちに、歴史のことくわしいね。

と言われてうれしくなり、なりたいた。でも、考古学者について、あまりくわしく知らなかつた。この本を読んだことをきっかけに、も、と夢を実現させるために調べてみようと思、た。

まず、考古学者になるためには、大学でせん門的に学んで、学芸員のしかくをとる。または大学院を出て、学者や研究者になる。私は博物館で働きたいと思、ているので、学芸員のしかくが必要なようだ。また、一つのこ

とに熱中したり、粘り強く取り組むせい
もとめられるそうた。私はすぐに無理と言
てしまうことが多いけど、ちがう方法をさが
したりちがう考え方に切りかえて努力してい
こうと思っただ。これからも夢の実現のため
栄ようとなる知しきや行動をしていきたい。

「モモ」

—

五年一組 片山 葉

ぼくは「ミビヤ エル・エンデ」の作品が好きだ。ミビヤ エル・エンデの本はいつもどういう意味なのかと考えさせられる。何度も何度も同じ文章を読み返したりして、読むのに時間がかかるとも、一冊の本の中にはたくさん人の物語やたくさんの世界が詰まっていた。わくわくする。だからミビヤ エル・エンデの作品が好きだ。二年前、一年くらいかけて「ぼく

てしない物語」をお母さんと読んだ。読み終えた時は今まで読んだ本と比べ物にならないくらい不思議で面白い本だと思った。そして次に「モモ」を読み始め、この夏やっと思い読み終えた。

モモは小さな女の子で、物語の主人公だ。モモが灰色の男たちからぬすまれた時間を取り戻したお話だ。ぼくは、この話に登場する亀のカシオペアが好きだ。カシオペアは予言で生きる亀で、大切なメッセージがある時

はカシオペイアのこうらに文字が浮かぶのだ。
ぼくもこんな未来が見える亀が欲しい。ぼく
は家で犬を飼っているけれど、背中に文字は
出てこない。けれども、ぼくを持っていて、
うれしかつたら、ぼくをふる。たまにうれし
すぎて、ぼくがうれしくなく、いふ。犬
は、ぼくを使っている。気持ちを伝えるの
で、カシオペイアとぼくの犬は違ふけれど、
伝え方が少し似ている。もしぼくの犬の背
中に文字が浮かび上がるとしたら、きつと文句

ばかり出てくると思う。

もっと遊んで！

みんなと同じおやつを食べたいな！

一緒に寝たいよ！

きれいなふわふわ布団の上でジャンプし

てみたいな！

ぼくはミビエ・エハ・エンデに色々質問が

ある。

どうしてマイスター・ホラはカシオペイア
を持っているの？

「どうしてカシオペアは先が読めるの。」
「灰色の男達は、どうやって生きたの。」
灰色の男達は人間の時間をぬすんで、時間
貯ちく銀行に貯めていく。大切な時間をぬす
んで、ためてを繰り返す。「今」が大切なそ
の時間を「今」のために使わず、時を貯めて
おいても、その時間は変わっていき、結局は
使う時がなくなってしまう。とぼくは思った。
時間は貯めて使う物ではなくて、ゆったりす
る時間、お話する時間、ホーッとする時間、

どんな時間も大切な時間だ。とぼくにとっ
ての時間、宿題をせずにおばあちゃんとの遊ぶ時間
もとぼくにとっではおばあちゃんとの大切な時
間なので無駄ではない。ポーンとする時間も
後で勉強するためには必要な時間だ。今ある
時間が大切に、時間は「時間貯ちく銀行」に
なんて入れられない。
とぼくは今まで時間の事なんて考えた事な
かった。でもこの本を読んで時間の事を考
えるようになった。でも時間について考える

事は、意外に難しい事に気付いた。誰もが持っている時間、誰にも公平に与えられる時間、いい時間、悪い時間、そこに無駄な時間ばかりなのかなと考えた。そして、よくわがらなくなってきたけれど、こうして考えたりする時間もぼく達には必要な時間だ、という事をこの本が教えてくれた。

「セロ弾きのゴーシュ」

六年一組 佐藤 里桜

「ごうごう、ごうごうごう」

あらしのような熱いで、なんべんも弾き続

け、夜通しチエロの音色を響かせる。私は、

この夏、宮沢賢治の「セロ弾きのゴーシュ」

を読んだ。主人公ゴーシュが動物との不思議

な体験を通して、今までうまく演奏できなかった

「第六交響曲」を見事に仕上げるまでをえ

がいている。私の心に響いた言葉。それは、

泉長がゴーシュに言った

「体がじょうぶだから、こんなこともできる

よ。ふつうの人なら死んでしまうからな」。

という言葉である。

国語の授業で「イーハトーブの夢」を学習

した。宮沢賢治のしょうがいを描くノンフィ

クションだ。賢治の人生を知ったあとに読ん

だから、「セロ弾きのゴーシュ」の中に出

てくる言葉や動作に「あ！」と気づく点が三

つあった。

まず一つ目は、ゴーシユが水を飲む場面である。ゴーシユは家に帰るとまずコップの水をガブガブ飲む。それからチエロの練習を始める。私は最初、もしかしたら、このコップの水が特別なものなのかもしれないと思った。なぜかというところ、水を飲んだ後に、動物たちが出てきて、動物と話せたりするからだ。しかし、最後にや、てきた野ねずみの親子の時だけ、ゴーシユはコップの水を飲まなかった。あれ、おかしいな。と思った。そう考える

と、コップの水はゴーシユにとって、特別なものではなかったかもしれない。しかし、賢治にとっては特別なものだったのだろうなと感じた。賢治は農業に人生をかけていたのだ、水を大切に思っていただろうし、賢治は亡くなる直前に、お母さん、すまないけど、水を一ぱいください。と言っておいしそうに水を飲んだ。私は、賢治は本当は、ゴーシユみたいに水をガブガブ

飲みたか、たかもしれないと思った。

二つ目に気づいたことは、楽長の、
「体がじょうぶだから、こんなこともできる
よ。ふつうの人なら死んでしまうからな。」
という言葉である。ゴーシユは動物たちから
ヒントをもらって、自分のチェロの弾き方で
改善しなければならぬところに気づき、ひ
たすら練習を続けた。朝になりつつあること
にや、と気づく日もあるくらい、動物とい
し、に練習した。こんなことができるのは体

が健康だからだ。体が弱かった賢治にとっ
ては、ゴーシユは、自分の理想の人物だ、たの
たろう。実際に賢治はチェロを買って練習し
ていたという。また、一セロ弾きのゴーシユ
の世界は、賢治の理想だ、たのたろう。なぜ
なら、賢治の夢は、人間も動物も植物もたが
いに心が通い合うような世界だ、たからであ
る。賢治はこの物語に夢をたくさんつめこん
だのたろうなと思った。
三つ目に気づいたのは、ゴーシユの態度と

心の変化だ。一番最初にやっ、てきたねこや、次にやっ、てきたか、こうに對しては乱暴だ、た。しかし、か、こうが言、ていたことは當た、ているかもしれないと感じて、そのあとから来る動物たちの言葉はち、んと聞くようにな、た。最後は、か、こうに悪いことをしたなと反省するまでになり、すなおに他から学ぶ気持ちにまど変わった。自分の直すべきところを、すなおに受け入れてひたすら練習すること、で、ゴーシュは他の人たちをひきつけ、くるくらの演奏をすることができた。

「ゼロ弾きのゴーシュ」を読んで、賢治は私に体がじ、うぶであることは、あたりまえのことではなく、本当に感謝しなければならな、いことだと教、えてくれた。そして、努力し、て続ければ必ず成果が出る時が来ること、また、すなおに人のアドバイスを聞くことの大切さを教、えてくれた。私は、これからの人生でかべにぶち当たることが何回もあると思うが、これらの教訓を思い出して、乗りこえて

いこうと思う。